

「吉野の奥」の歌について

松本 昭彦

一 問題の所在

吉野は古くからの歌枕であるが、雪や桜などの景物が詠まれる一方で、隠遁の地としても和歌に詠まれた。例えば、

・『古今集』卷十八・雑下 題しらず 詠み人知らず

九五〇 み吉野の山のあなたに宿もがな 世の憂き時のかくれがにせむ

・『後撰集』卷十一・恋四 女につかはしける 贈太政大臣

八〇八 ひたすらに厭ひ果てぬる物ならば 吉野の山に行方知られじ

・ 同 返し 伊勢

八〇九 我が宿とたのむ吉野に君し入らば 同じかざしを挿しこそはせめ

のように仏教的性格ははっきりしないが、おそらく奈良時代以前からある神仙境としての性格を背景に、世間を離れて隠棲する地として詠まれている。

そして、性格的にはこれとほとんど同じだが、後の時代にはより仏教的な性格が強い隠遁の地として吉野のさらに奥へ奥へが詠まれるようになる。本レポートでは、この「吉野の奥」がいつごろ、誰によって詠まれ始め、どのように広まっていたのか、等について考えてみたい。

新編国歌大観から「吉野の奥」が隱遁の地として詠まれた歌を探すと、十三世紀前半くらいまでは、〈資料1〉のように二十三首が見つかった。これらの作品の成立と和歌作者の生存年代等から、大体の和歌の製作順を推定して示すと〈資料2〉のようになる。この表の掲載順は、当然ある程度誤差があるはずだが、それでも大体の傾向ははっきりしていると思われる。つまり、a 顕季の歌が飛び抜けて早く、次いで俊成や西行によって十二世紀半ばから後半に詠まれ、さらに藤原定家や慈円らその次の世代の歌人によって十三世紀初めまでに多く詠まれるようになったというものである。

さて、最も早い顕季の和歌は、

a 詞花集・卷七・恋上 堀河院御時、百首歌たてまつりけるによめる 修理大夫顕季

二一二 わが恋は吉野の山のおくなれや 思ひ入れどもあふ人もなし

というものである。藤原顕季は一一二三年に亡くなっており、この歌だけが孤立して早いと言えよう。「吉野の奥」を思いを抱いて入るところで、しかも山深いそこでは人に会うことがないと表現している。それを自分の恋の状況になぞらえているのである。

この歌は恋の歌であることもあつてあまり仏教色を感じさせない。西行のb 山家集の歌も、このaの影響で詠まれたものと思われる。「思ひ」という語が使われているからである。しかし、西行は僧侶であるだけに、もつと仏教の性格（菩提を求めるときの修行の地としての「吉野の奥」）を出したc 聞書集の歌もある。aの影響かはわからないが、西行と同世代としては、もう一人藤原俊成もe 玄玉集の歌を残す。

そして、「吉野の奥」が一気に広まったのが、西行・俊成の次の世代である。定家は俊成の子、慈円は西行と同じ僧侶であることを考えると、これら新古今時代の歌人たちが「吉

野の奥」を多く詠むようになったのは、前の西行・俊成の直接的影響ではないかと考えられるのである。特に、自分自身が実際「吉野の奥」に籠もった時期を持つ西行は、後代の「吉野の奥」詠に大きな影響を与えたと言っているだろう。

次に、少し和歌の内容で気の付いたことを挙げれば、世俗を離れての隠棲の地としての「吉野の奥」であつても、桜の名所であるからには、それと共に詠まれることが大変多いということである。〈資料1〉に挙げたもののうち、bcfhijkqsuの十首を数え、ほぼ半数に上る。そしてこれも、西行のb・cの歌で花と「吉野の奥」が関連づけて詠まれている影響が考えられるのである。ただ、花と隠棲の関連としては、西行の歌では「花もたづねんまた思ひあり」のように桜の花を見ることがと世の憂さを離れるための隠棲とは調和するもの、親和的なものとしてあるが、f千載集の定家の歌では「吉野の奥でさえ花は散るのであれば、その憂いはあるのであり、どこで世の憂さや風を厭えばよいのか」と歌っており、花を見ることがと憂さから逃れることが、「吉野の奥」において実は両立しないと言っている。他にi御室五十首の覚延、u露色随筆集の空体坊鏝也の歌も同様である。西行の歌を少し発展させたものと言えよう。もつとも、後代でもjq sのように西行と同様の詠みぶりのものも当然ある。

また、世を厭う地として「吉野の奥」が常識になったことを前提に、「厭ひ入る心の底の澄みぬれば」と、仏道上の心境の進化によつて、『吉野の奥』ではまだ浅いくらいだ。もつと深い『奥』があればよいのに」と詠む。拾玉集（慈円）や同様のg拾玉集（隆寛）の歌もあつて、同じ「吉野の奥」が詠まれていても、それ以前の歌を前提に、新しい境地を詠み進めて行く様子が窺える。

〈資料1〉

「吉野の奥」と隠遁の和歌

a 詞花集・卷七・恋上 堀河院御時、百首歌たてまつりけるによめる 修理大夫顕季

二一二 わが恋は吉野の山のおくなれや 思ひいれどもあふ人もなし

b 山家集(西行)・卷上・雑 題しらず

一〇三四 山人よ吉野の奥のしるべせよ 花もたづねんまた思ひあり

c 聞書集(西行) 尋花欲菩提

六三 花の色の雪のみ山に通へばや 深き吉野の奥へ入らるる

d 御裳洗濯河歌合(西行自撰。藤原俊成判)・二六番左

五一 世を憂しと思ひけるにぞ成りぬべき 吉野の奥へ深く入りなば

e 玄玉集(撰者未詳)・卷一・神祇 春日の社に百首歌たてまつられける中に

皇太后宮大夫 俊成

三一 世をすてば吉野の奥に住むべきを 猶ほ頼まるる春日山かな

f 千載集・卷十七・雑中 円位法師が勧め侍ける百首歌の中に、花の歌とてよめる

藤原定家

一〇七三 いづくにて風をも世をも恨みまし 吉野のおくも花は散るなり

g 拾玉集(慈円)・第五 建久二年五月のころ、隆寛阿闍梨のもとより十首の詠おくれ

りける (隆寛)

五二七一 押し込めて厭ふべき身を思ふには 吉野の奥も猶ほ浅きかな
h 後京極殿御自歌合 (藤原良経詠・俊成判。建久九年)・八十五番・雑・左 花の歌詠み

ける中に

一六九 しをりせで吉野の奥や尋ねまし やがてと思ふ心ありせば

i 御室五十首 (守覚法親王命)・詠五十首和歌・春 阿闍梨覚延

七七一 憂き事もあらじと思ひし吉野の奥にも花の散るを見るかな

j 三百六十番歌合・第一・五十番左 有家

九九 憂き世出でて誰詠むらむ 桜咲く吉野の奥の春の曙

k 新古今・卷十七・雑中 五十首歌たてまつりし時 前大僧正慈円

一六一八 花ならでただ柴の戸をさして思ふ 心の奥もみよしの山

l 新古今・卷十六・雑上 題しらず 法印幸清

一四七六 世をいとふ吉野の奥のよぶこ鳥 ふかき心のほどや知るらん

m 新古今・卷十七・雑中 題しらず 藤原家衡朝臣

一六二〇 厭ひてもなほいとほしき世なりけり 吉野の奥の秋の夕暮

n 拾玉集 (慈円)・第一・百首 (冬八首)

三六五 さびしさを何に例へん世を捨つる 吉野の奥の冬の夕暮れ

o 拾玉集 (慈円)・第二・詠百首和歌・雑 山家

一四九五 厭ひ入る心の底の澄みぬれば 吉野の奥も猶ほ浅きかな

p 拾玉集 (慈円)・第二・詠百首和歌く法門妙経八卷之中取百句> 序品・入於深山

二四〇八 吉野山奥の住処を尋ねつつ 仏の道はこれよりぞ知る

q 拾玉集(慈円)・卷四 深山

四七三六 思ひきや吉野の奥の柴の戸に 花をながめて暮らすべしとは

r 金槐集(源実朝)・雑 雑歌中に

六八九 嘆きわび世を背くべき方知らず 吉野の奥も住み憂しと言へり

s 露色随筆集(空体坊鑊也) 閑居百首

一一四 隠れ居む吉野の奥を花見にと 心深くもわきて思ふかな

t 露色随筆集(空体坊鑊也) 閑居百首

一六二 世の中の疎くならずはみ吉野の 吉野の奥の春知らましや

u 露色随筆集(空体坊鑊也) 閑居百首

一六七 さらにさは憂きことを見ぬ山もがな 吉野の奥も花は散りけり

v 万代和歌集・卷十四・雑一 大峯の禪師といふ所にて、雪の降りていと心細く侍りければ 僧正行意

二九五五 雪深き吉野の奥のかげちこそ 憂き身を捨つる限りなりけれ

w 植葉集(1237素俊撰)・卷八・釈教 光明院の月次歌よみて遣はしける

縁定法師

五九七 世を捨てて住まばやと思ふみ吉野の 奥より匂ふ花の春風

〈資料2〉

所収作品・同成立

作者・同生没

和歌成立

a 詞花集 1151

藤原顕季 1055~1123

未詳

u 露色随筆集	1 3 C 初	空体坊鏤也	?	1 2 0 4	1 2 1 6	の	間か
t 露色随筆集	1 3 C 初	空体坊鏤也	?	1 2 0 4	1 2 1 6	の	間か
s 露色随筆集	1 3 C 初	空体坊鏤也	?	1 2 0 4	1 2 1 6	の	間か
r 金槐集	1 2 1 3	源実朝	1 1 9 2	1 2 1 9		未詳	
q 拾玉集	1 3 4 6	慈円	1 1 5 5	1 2 2 5		未詳	
p 拾玉集	1 3 4 6	慈円	1 1 5 5	1 2 2 5		未詳	
o 拾玉集	1 3 4 6	慈円	1 1 5 5	1 2 2 5		未詳	
n 拾玉集	1 3 4 6	慈円	1 1 5 5	1 2 2 5		未詳	
m 新古今	1 2 0 5 ころ	藤原家衡	1 1 7 9	1 2 4 5		未詳	
l 新古今	1 2 0 5 ころ	法印幸清	1 1 4 2	1 2 1 4		未詳	
k 新古今	1 2 0 5 ころ	慈円	1 1 5 5	1 2 2 5		建仁元年 (1201)	
j 三百六十番歌合	1 2 0 0	藤原有家	1 1 5 5	1 2 1 6		未詳	
i 御室五十	1 1 9 9 か	覚延 (12世紀末の教長集に贈答歌)	1 1 6 9	1 2 0 6		未詳	
h 後京極殿	1 1 9 8	藤原良経	1 1 4 8	1 2 2 7		未詳	
g 拾玉集	1 3 4 6	隆寛	1 1 6 2	1 2 4 1		未詳	
f 千載集	1 1 8 8	藤原定家	1 1 1 4	1 2 0 4		未詳	
e 玄玉集	1 1 9 1	藤原俊成	1 1 1 8	1 1 9 0		未詳	
d 御裳濯河歌合	1 1 8 7	西行	1 1 1 8	1 1 9 0		未詳	
c 聞書集	未詳	西行	1 1 1 8	1 1 9 0		未詳	
b 山家集	未詳	西行	1 1 1 8	1 1 9 0		未詳	

v 万代和歌集 1 2 4 8
w 檜葉集 1 2 3 7

僧正行意 1 1 7 1 } 1 2 1 7
縁定法師 ?

未詳 未詳